速報版

子どもの生活と学びに関する親子調査2015-2017

ISS 東京大学社会科学研究所
ベネッセ教育総合研究所

「子どもの生活と学び」研究プロジェクトについて

■研究プロジェクトの目的

東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所は、2014年1月に、「子どもの生活と学び」の実態を明らかにする共同研究プロジェクトを立ち上げました。このプロジェクトは、子どもの生活や学習の状況、保護者の子育ての様子を複数年にわたって調査し、それらが子どもの成長とともに、どのように変化するのかを明らかにするものです。これにより、子どもの生活や学習、子育ての現状や課題をとらえ、よりよい教育や子育てのあり方を検討します。

■研究プロジェクトの特徴

1. 小学1年生から高校3年生の「現在」と「時代変化」をとらえることができる

このプロジェクトでは、小学1年生から高校3年生の子どもとその保護者に対して、毎年継続して調査を実施します。これにより、12学年にわたる子どもの生活や学び、保護者の子育ての実態などの「現在」の様子（1時点の学年による違い）を明らかにできます（図中①）。また、経年比較により、子どもと保護者の「時代変化」をみることができます（図中②）。

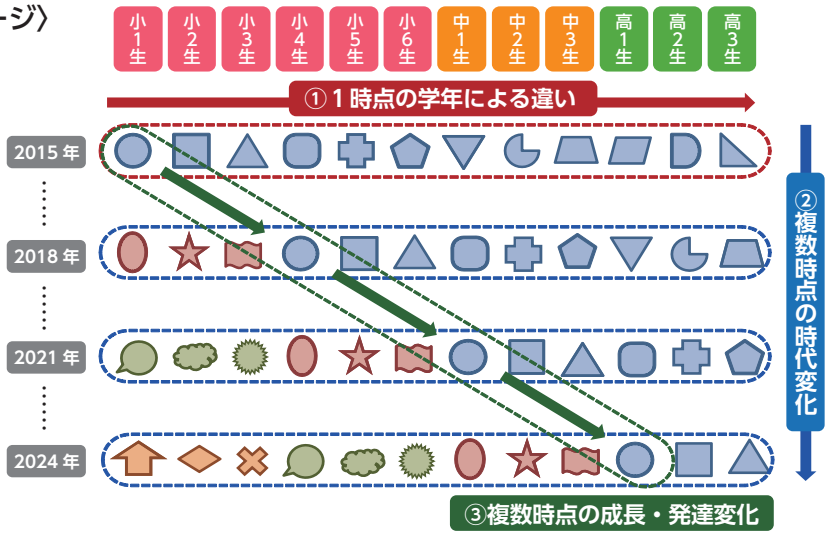
2. 親子の「成長・発達」のプロセスをとらえることができる（親子パネルデータ分析）

また、このプロジェクトでは、同じ子どもとその保護者を継続して調査します。これにより、子どもが毎年どのように成長・発達していくのか、また、それによって保護者のかかわりや意識はどのように変化するのかといった、親子の「成長・発達」の様子や因果関係を明らかにすることができます（図中③）。

3. 子どもの生活と学習にかかわる意識や実態を幅広く、詳細にとらえることができる

子どもを対象にした調査では、生活、学習、人間関係、価値観、自立の程度などを幅広く尋ねています。また、保護者を対象にした調査では、子どもへのかかわりや子育て・教育の意識などを尋ねています。この2つの調査から、子どもと保護者の日々の生活や学習の様子を浮かび上がらせるとともに、子どもと保護者の課題に迫ります。

〈調査イメージ〉



目　次

「子どもの生活と学び」研究プロジェクトについて……2
調査概要……3
調査設計・データについて・基本属性……4～5
友だち関係……6～7
つきあい（彼・彼女）……8
親子関係……9
自分について……10～11
社会に対する意識……12～13
大人のイメージ・なりたい人（あこがれ・目標）……14～15
自分（子ども）の将来像……16～17
おこづかい・お金に対する感覚……18～19
満足度・幸福感……20～21

調査概要

●**調査テーマ**　【子ども調査】子どもの生活と学習に関する意識と実態
【保護者調査】保護者の子育て・教育に対する意識と実態
※第１回は「生活」、第２回は「学習」、第３回は「人間関係」「価値観」について詳しく尋ねている。

●**調査時期**　第１回：2015年７～８月、第２回：2016年７～８月、第３回：2017年７～９月

●**調査方法**　第１回：郵送およびインターネットによる自記式質問紙調査　※回答者がいずれかの方法を選択。
第２回：郵送による自記式質問紙調査
第３回：郵送による自記式質問紙調査

●**調査対象**　全国の小学１年生から高校３年生の子どもとその保護者　※小学１～３年生は保護者が回答。

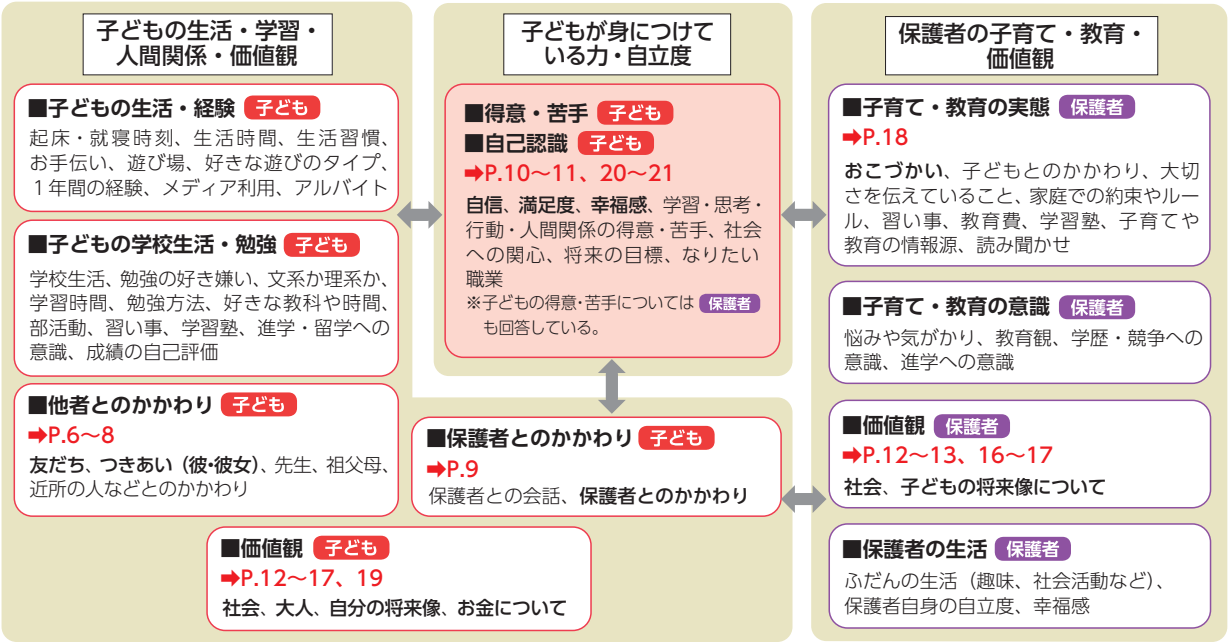
学年	子ども							
	第１回（2015年）子ども 2015		第２回（2016年）子ども 2016		第３回（2017年）子ども 2017		パネルデータ 子ども 2015-2017	
小学４年生	1,345	3,972 (78.2%)	1,357	3,823 (73.0%)	1,238	3,655 (78.2%)	–	–
小学５年生	1,292		1,245		1,260		–	–
小学６年生	1,335		1,221		1,157		976	[72.6%]
中学１年生	1,343	4,091 (76.1%)	1,178	3,730 (71.4%)	1,076	3,321 (76.8%)	924	2,850 [71.8%]
中学２年生	1,366		1,255		1,077		945	
中学３年生	1,381		1,297		1,168		981	
高校１年生	1,267	3,919 (69.9%)	1,195	3,461 (64.0%)	1,092	3,194 (71.4%)	934	2,640 [65.8%]
高校２年生	1,291		1,115		1,081		898	
高校３年生	1,360		1,144		1,014		804	

学年	保護者							
	第１回（2015年）保護者 2015		第２回（2016年）保護者 2016		第３回（2017年）保護者 2017		パネルデータ 保護者 2015-2017	
小学１年生	1,755	4,707 (85.5%)	1,853	4,923 (87.6%)	1,886	5,167 (90.5%)	–	–
小学２年生	1,434		1,668		1,713		–	–
小学３年生	1,510		1,398		1,568		1,444	[82.3%]
小学４年生	1,345	3,975 (78.2%)	1,364	3,863 (73.8%)	1,251	3,674 (78.6%)	1,095	3,154 [73.5%]
小学５年生	1,293		1,247		1,261		1,075	
小学６年生	1,336		1,224		1,162		984	
中学１年生	1,351	4,130 (76.8%)	1,177	3,750 (71.8%)	1,084	3,338 (77.2%)	932	2,882 [72.4%]
中学２年生	1,384		1,260		1,080		950	
中学３年生	1,393		1,297		1,174		1,000	
高校１年生	1,287	3,964 (70.7%)	1,196	3,477 (64.3%)	1,094	3,210 (71.8%)	942	2,678 [65.9%]
高校２年生	1,302		1,115		1,089		915	
高校３年生	1,374		1,143		1,020		818	

※第１回、第２回は、本研究プロジェクトの「調査モニター（小学１年生から高校３年生の子どもとその保護者）」全員に調査票を配布した。第３回は、第１回か第２回の少なくともいずれか一方に回答した人を「調査モニター」として調査票を配布した。第１回（2015年）の「調査モニター」は21,569組、第２回の「調査モニター」は21,485組。第３回の「調査モニター」は19,173組。
※第１回（2015年）、第２回（2016年）、第３回（2017年）の数値は、各回の有効回収数。（　　）内は有効回収率。
※パネルデータの数値は、第１回（2015年）～第３回（2017年）のすべてに回答した有効回収数（2017年の学年）。［　　］内は第１回に回答した人に占める第３回に回答した人の比率（継続率）。
※学年別の有効回収数は、３学年ごとの有効回収数のうち学年が特定できている回答の数。

調査設計

「子どもの生活・学習・人間関係」の意識・実態や「保護者の子育て・教育」の意識・実態が、「子どもが身につけている力」や「自立」の程度とどのように関連しているのか、また、それらが高校卒業時点での「自立」にどのようにつながっていくのかを明らかにできる設計である。



※上記以外に、子どもの属性、保護者の属性に関する項目を尋ねている。　※本速報版に掲載している項目を太字で示している。

データについて

●単年データについて

本文中の 子ども 2017 は第3回（2017年）の子どもの回答、 保護者 2017 は第3回（2017年）の保護者の回答を示している。本速報版では、第3回（2017年）に親子とも回答があったケースを分析している。

●パネルデータについて

本速報版のP.10～11では、第1回（2015年）、第2回（2016年）、第3回（2017年）のすべてに親子とも回答があったケースを「パネルデータ」として分析している。「パネルデータ」では、子ども（あるいは保護者）1人ひとりについて、2年前（2015年）、1年前（2016年）の回答と現在（2017年）の回答を比べ、その変化をみることができる。 子ども 2015-2017 は子どものパネルデータを示している。

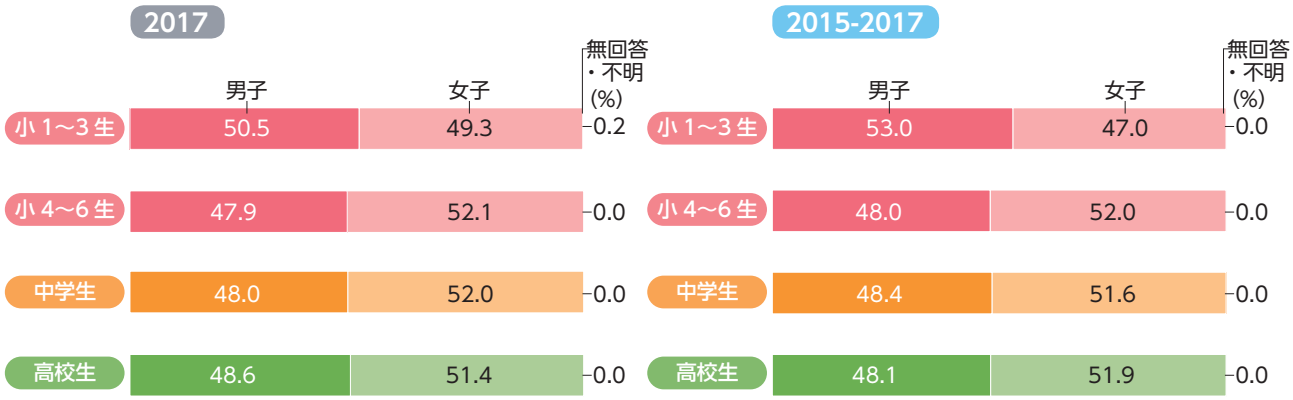
●データを読む際の注意点

①本文中では、小学4年生を「小4生」のように表記している。また、中学1～3年生を「中学生」、高校1～3年生を「高校生」と表記している。

②図表で使用している百分率（%）は、小数点第2位を四捨五入して算出している。そのため、四捨五入の結果、数値の和が100.0にならない場合がある。

基本属性

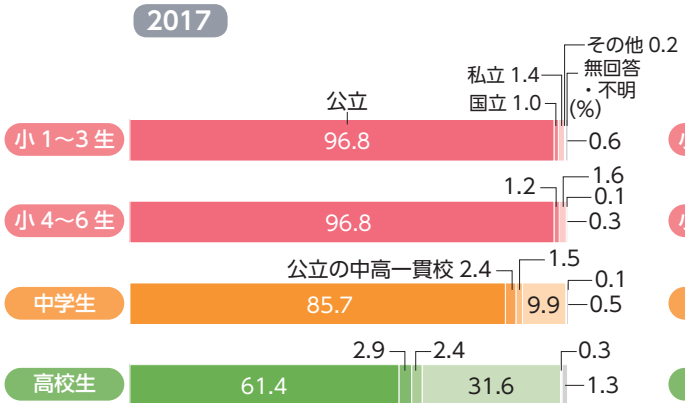
●子どもの性別（学校段階別）



注1　小1～3生は保護者の回答。
注2　2015-2017 は2017年の学年。

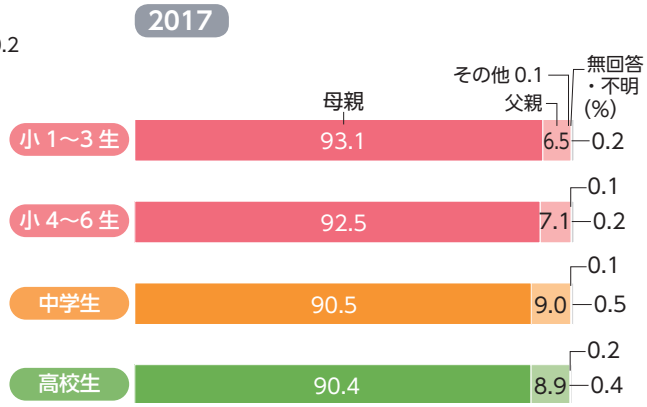
基本属性

●子どもが通っている学校の種類（学校段階別）



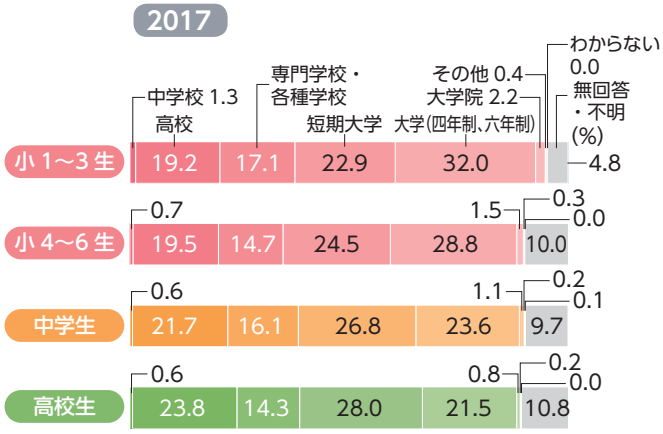
注　保護者の回答。

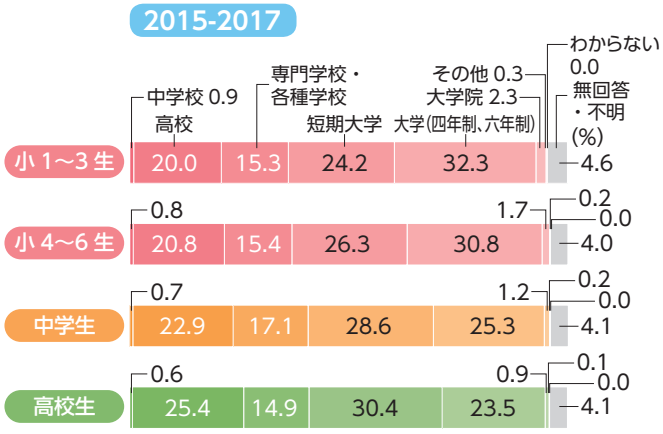
●保護者（回答者）と子どもとの続柄（学校段階別）



注 1　「その他」は「祖母」＋「祖父」＋「その他」の%。
注 2　保護者の回答。

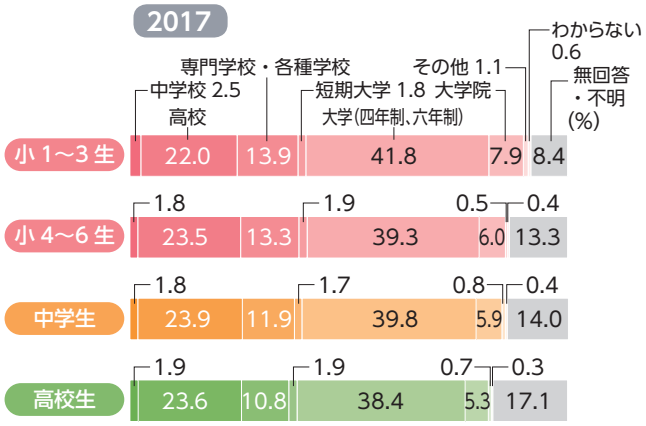
●母親の最終学歴（学校段階別）

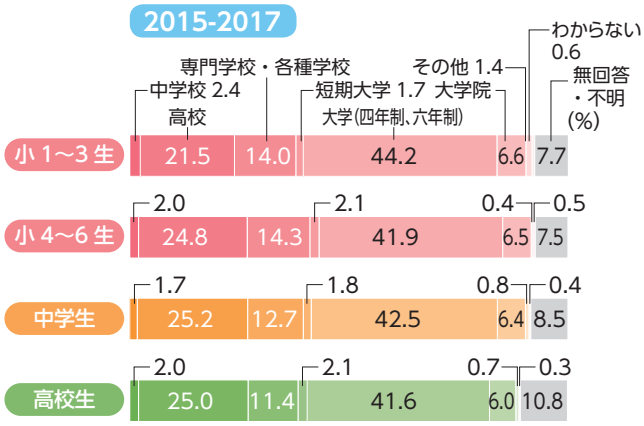




注 1　調査初回の保護者本人と配偶者についての回答をもとに作成。
注 2　2015-2017 は 2017 年の学年。

●父親の最終学歴（学校段階別）





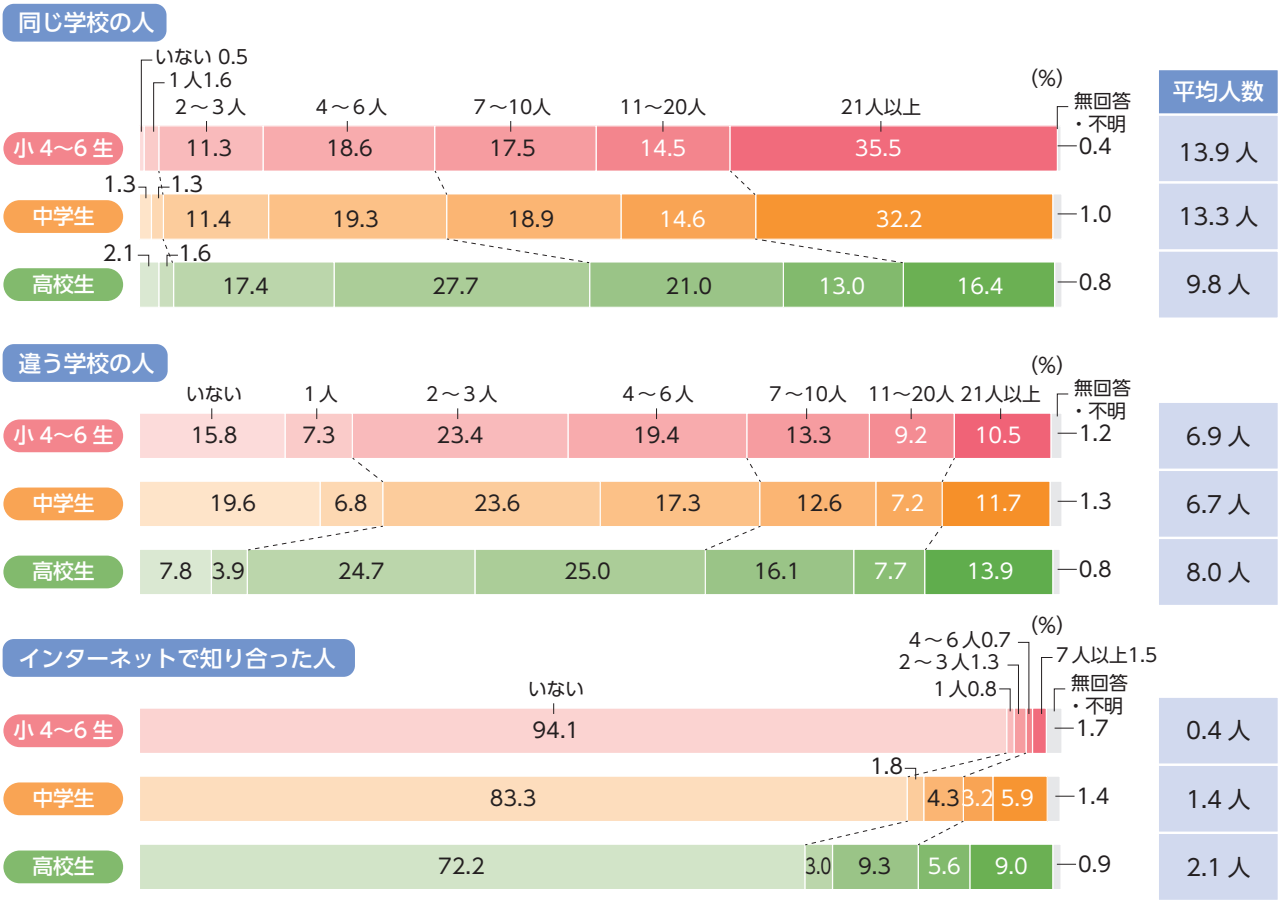
注 1　調査初回の保護者本人と配偶者についての回答をもとに作成。
注 2　2015-2017 は 2017 年の学年。

「同じ学校」の友だちの数は高校生ほど少ない

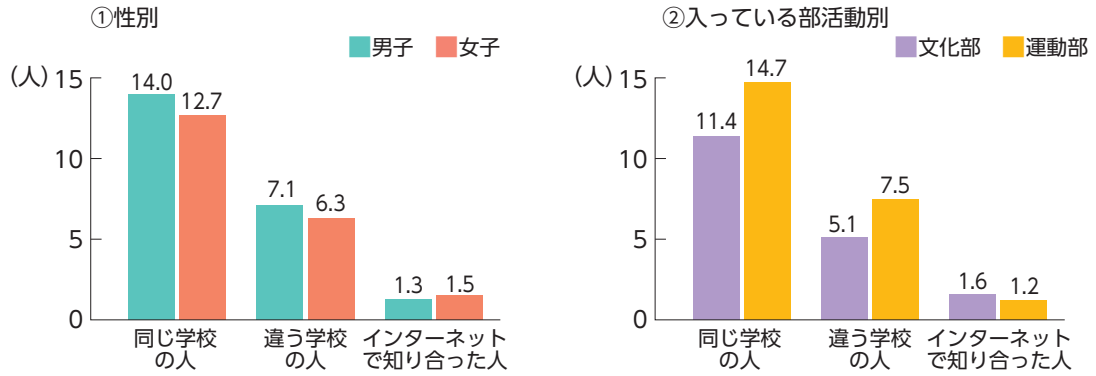
仲の良い友だちの数を尋ねたところ、「同じ学校」の友だちは、小中学生は「21人以上」の比率が高く、平均人数も13人台である。一方、高校生は「4～6人」の比率が高く、平均約10人である。「違う学校」の友だちは、どの学校段階でも「いない」～「21人以上」までばらつきがみられ、平均約7～8人である。「インターネットで知り合った」友だちは、「いない」の比率が高いが、高校生では4人に1人以上が「いる」（「1人」～「7人以上」）と回答している。

Q あなたは、次の人のなかに、仲の良い友だちが何人くらいいますか。

子ども 2017　図1－1　仲の良い友だちの数（学校段階別）



子ども 2017　図1－2　仲の良い友だちの数（中学生／平均人数）



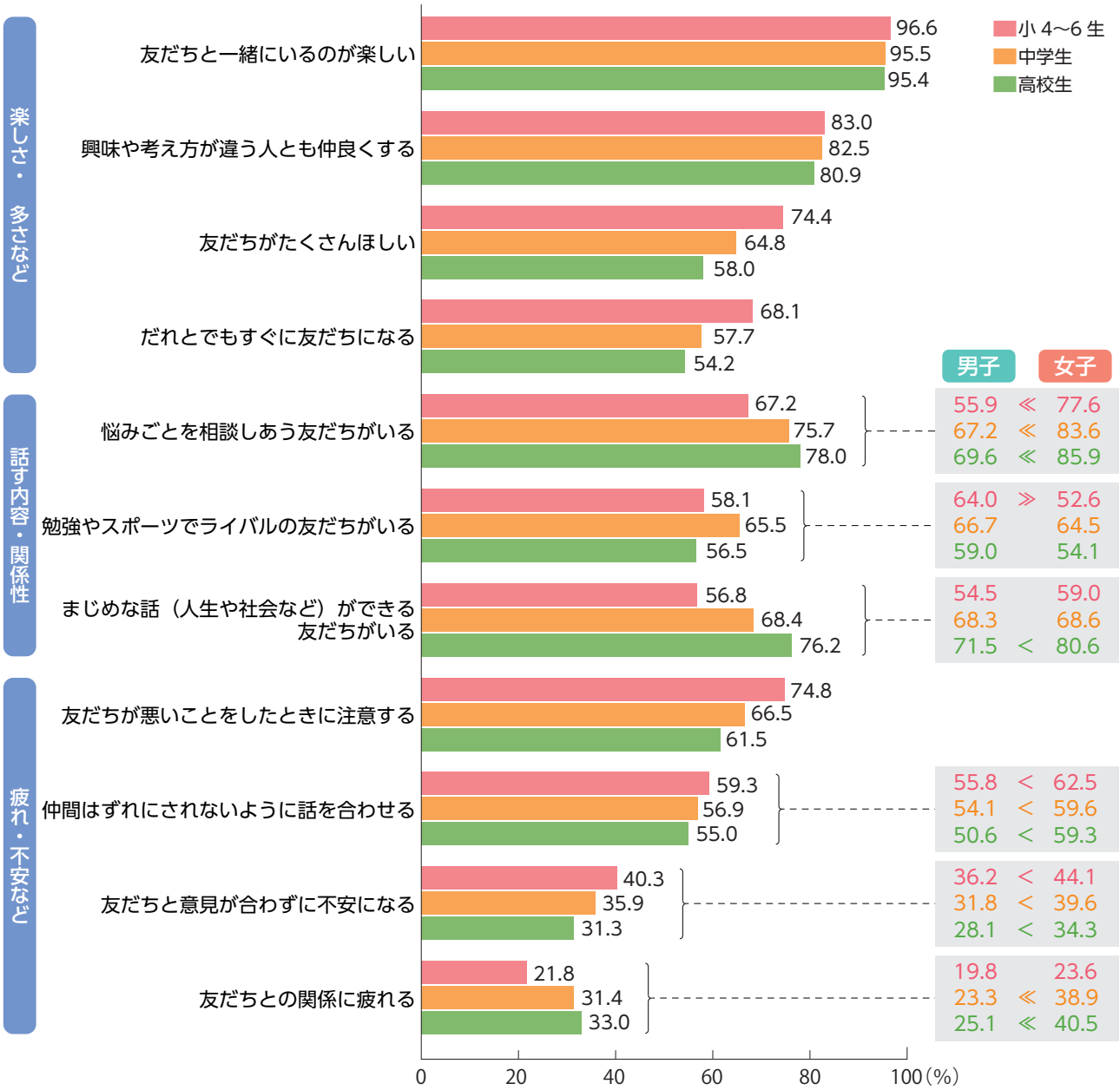
注1　「インターネットで知り合った人」の「7人以上」は「7～10人」＋「11～20人」＋「21人以上」の％（図1－1）。
注2　平均人数は、「いない」を0人、「1人」を1人、「2～3人」を2.5人、「21人以上」を25人のように置き換えて、無回答・不明を除いて算出した（図1－1、図1－2）。

「ライバル」は中学生、「まじめな話ができる友だち」は高校生で「いる」の比率が高い

どの学校段階でも、95％以上が「友だちと一緒にいるのが楽しい」、８割以上が「興味や考え方が違う人とも仲良くする」と、友だち関係を肯定的にとらえている。また、「ライバルの友だちがいる」は中学生で、「悩みごとを相談しあう友だちがいる」「まじめな話ができる友だちがいる」は中高生で比率が高い。一方で、中高生では、「友だちとの関係に疲れる」の比率も３割台である。性別にみると、女子は男子に比べて、「悩みごとを相談しあう友だちがいる」の比率が高い一方で、「友だちとの関係に疲れる」の比率も高い。

Q 友だちとの関係について、次のことがどれくらいあてはまりますか。

子ども 2017　図１－３　友だちとの関係（学校段階別、性別）



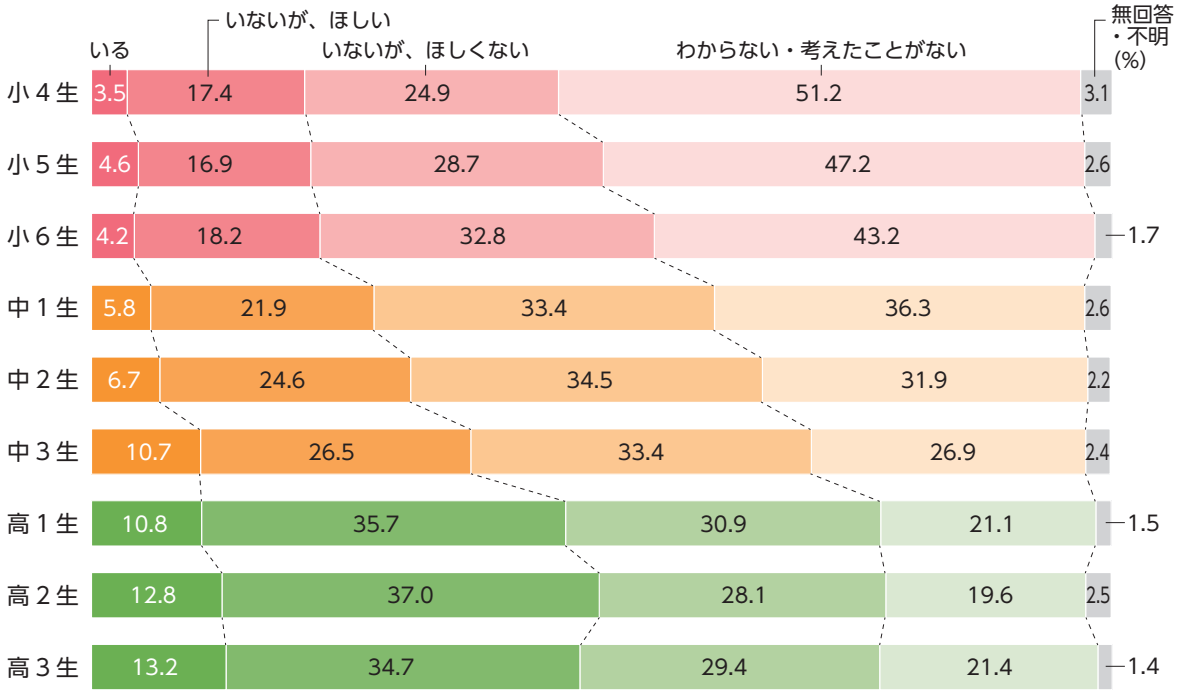
注１　「とてもあてはまる」＋「まああてはまる」の％。
注２　いずれかの学校段階で、性別で５p以上差がある場合に、性別の数値を示した。また、10p以上差がある場合は≪≫を、５p以上10p未満の差がある場合は＜＞をつけた。

小中学生は、女子の方が、つきあっている人は「いないが、ほしい」と回答

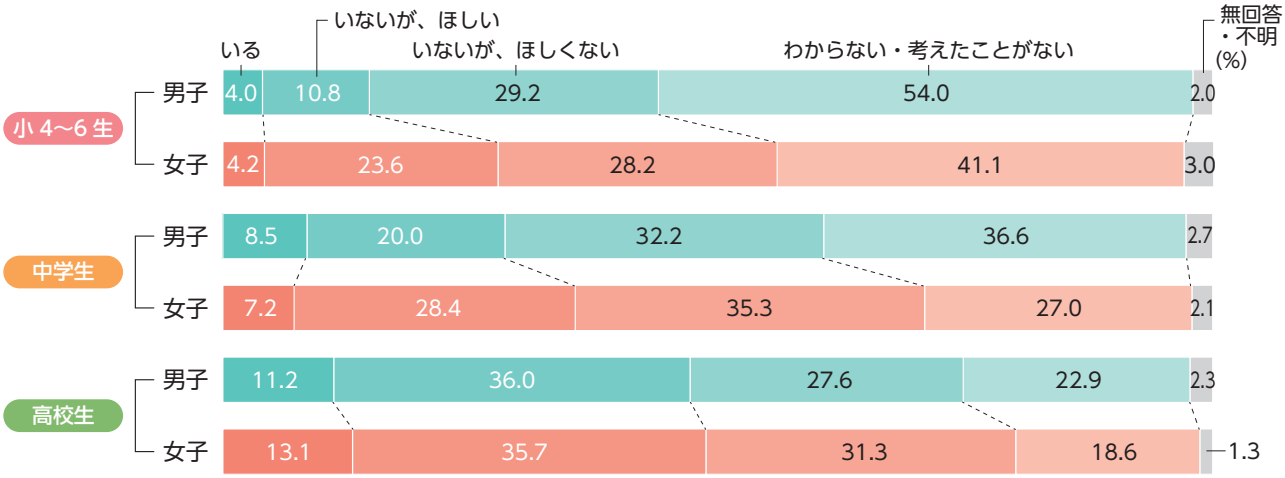
つきあっている人が「いる」の比率は、中３生～高３生で１割強である。また、「いないが、ほしい」の比率は、学年とともに高まり、高校生で３割台となる。一方で、「いないが、ほしくない」の比率は、どの学年でも２～３割台、「わからない・考えたことがない」は、小４生で約半数、高校生で２割前後である。性別にみると、小中学生では、女子のほうが「いないが、ほしい」の比率が高く、男子のほうが「わからない・考えたことがない」の比率が高い。

Q あなたには、今、つきあっている人（彼や彼女）がいますか。

子ども 2017　図２－１　つきあっている人がいるか（ほしいか）（学年別）



子ども 2017　図２－２　つきあっている人がいるか（ほしいか）（学校段階別・性別）



小４～６生は男子、高校生は女子のほうが「親にさからう」と回答

子どもに、「親にさからう」こと、「親に悩みを話す」ことがあるかを尋ねたところ、「親にさからう」ことが「ある」のは６～７割で、中２生～高１生の比率が高い。一方、「親に悩みを話す」ことが「ある」は、小４～５生は６割台であるが、小６生以上は５割台である。性別にみると、小４～６生は男子、高校生は女子のほうが「親にさからう」ことが「ある」の比率が高い。また、「親を超えるような生き方をしたい」かを尋ねたところ、「あてはまる」の比率は７割前後で、小中学生に比べて高校生のほうがやや低い。性別にみると、男子のほうが高い。

Q 人とのかかわりについて、次のようなことがどれくらいありますか。

子ども 2017　図３－１　親にさからう・親に悩みを話す
（学校段階別、学年別）

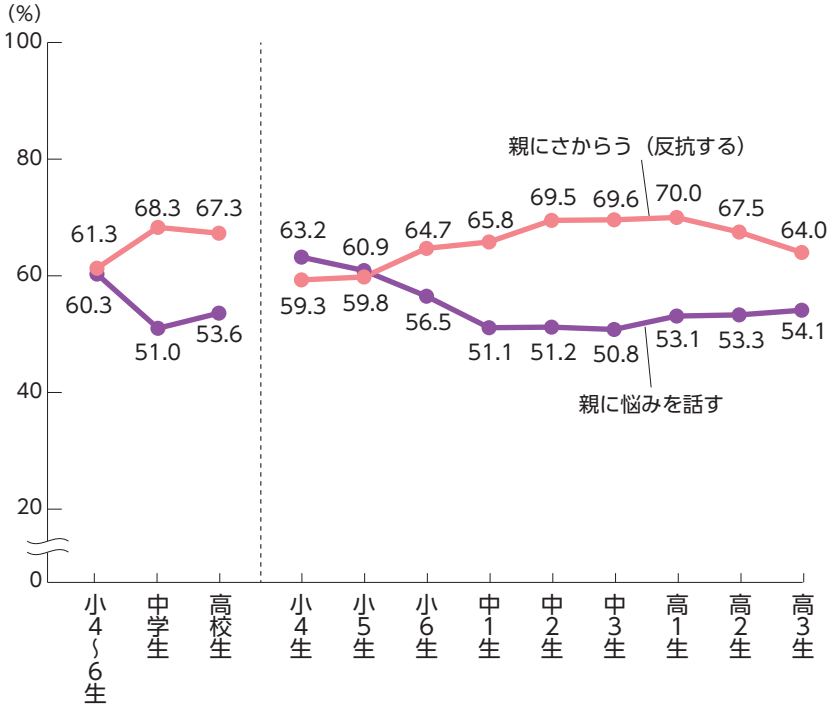
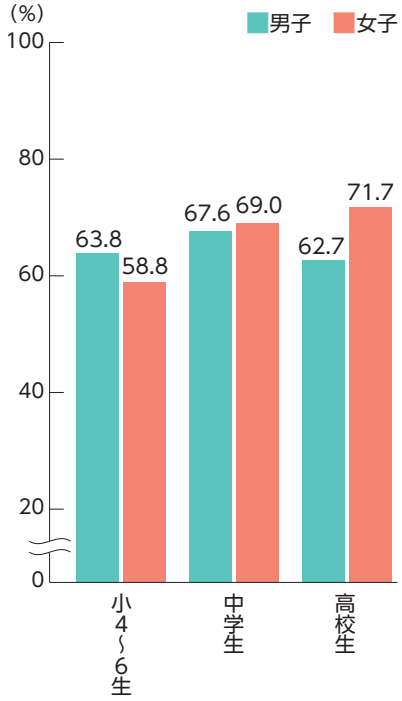
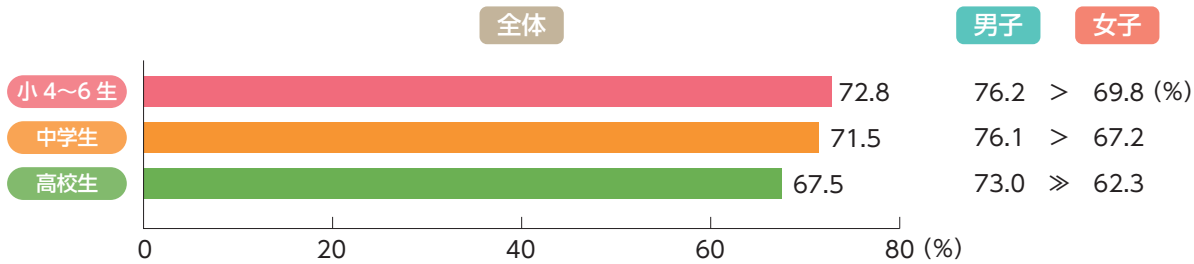


図３－２　親にさからう
（学校段階別・性別）



Q あなた自身の将来について、次のことはどれくらいあてはまりますか。

子ども 2017　図３－３　親を超えるような生き方をしたい（学校段階別、性別）



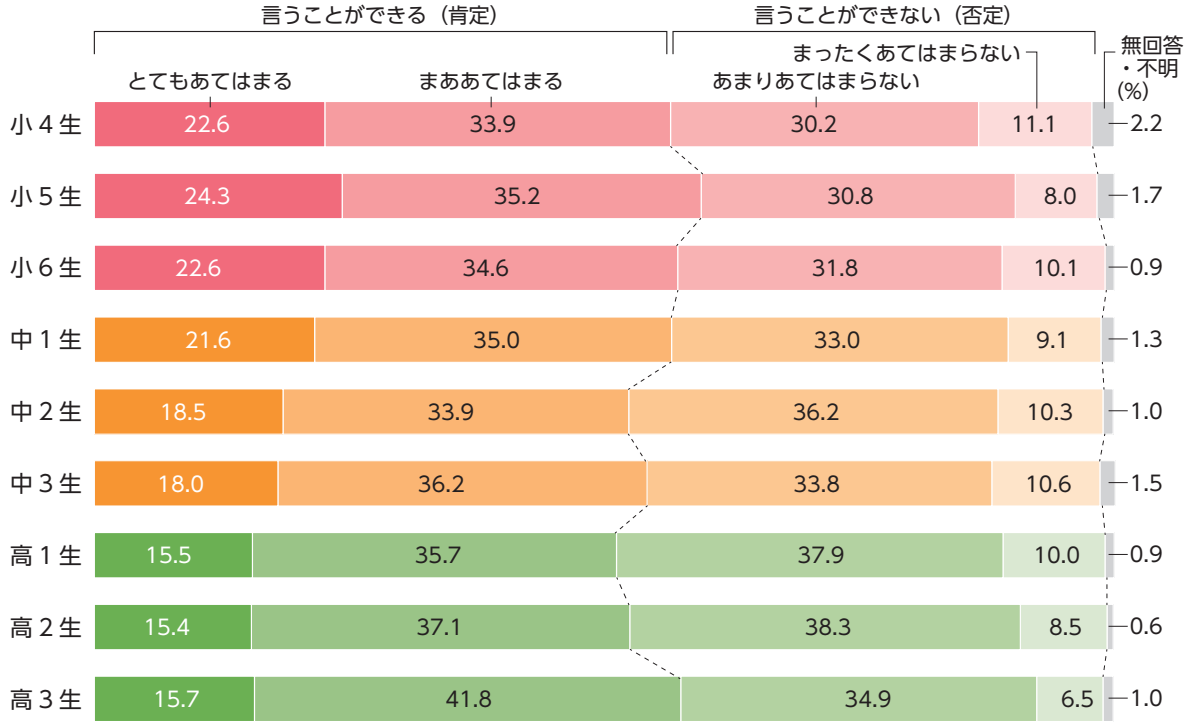
注１　「よくある」＋「ときどきある」の%（図３－１、図３－２）。
注２　「とてもあてはまる」＋「まああてはまる」の%（図３－３）。
注３　性別で10p以上差がある場合は≫を、５p以上10p未満の差がある場合は＞をつけた（図３－３）。

2年の間に、自分の長所を言うことが「できる→できない」「できない→できる」と変化した子どもが約5割

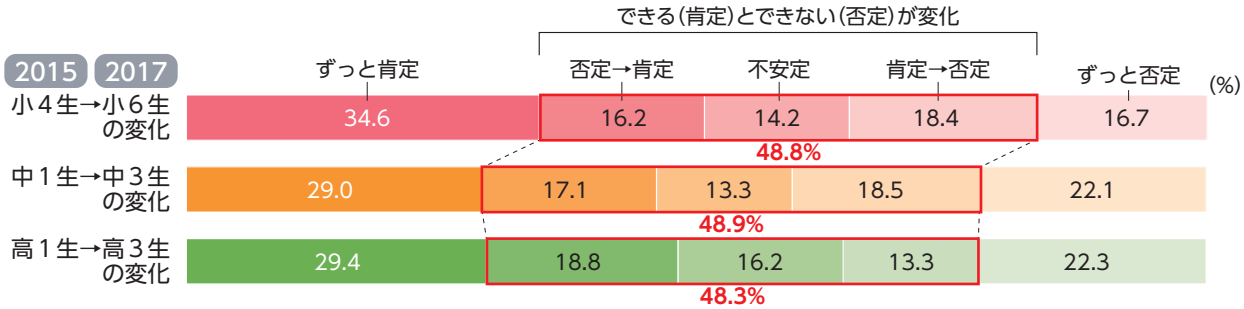
「自分の良いところが何かを言うことができる」かを尋ねたところ、「言うことができる」（肯定）は5割台、「言うことができない」（否定）は4割前後である。しかし、同じ子どもに2年前（2015年）、1年前（2016年）、現在（2017年）と同じ内容を尋ねて変化をみたところ、「自分の良いところが何かを言うこと」が「できる」をずっと維持している子ども（ずっと肯定）は3割前後、「できない」のままの子ども（ずっと否定）は2割前後で、残りの約5割は「できる」（肯定）、「できない」（否定）が変化している。

Q あなた自身のことについて、次のことはどれくらいあてはまりますか。

子ども 2017　図4－1　「自分の良いところが何かを言うことができる」かどうか（学年別）



子ども 2015-2017　図4－2　「自分の良いところが何かを言うことができる」かどうかの3時点（2年間）の変化（小6生・中3生・高3生）



注1　「とてもあてはまる」と「まああてはまる」を「肯定」、「あまりあてはまらない」と「まったくあてはまらない」を「否定」としている（図4－1、図4－2）。
注2　2015年、2016年、2017年の3時点で、同じ子どもに同じ内容を尋ねて変化をみたもの。2017年の小6生、中3生、高3生の結果のみを示している。「否定→肯定」は「否定→肯定→肯定」＋「否定→否定→肯定」の%。「肯定→否定」も同様。「不安定」は「肯定→否定→肯定」＋「否定→肯定→否定」の%。3時点のいずれかが無回答・不明の場合は除いている（図4－2）。

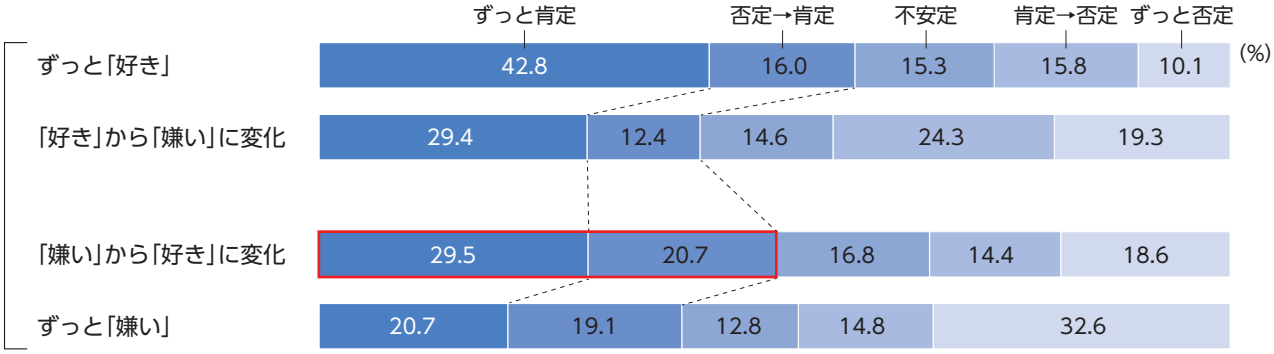
将来目標が「明確」になった子どもは、ずっと「不明確」の子どもに比べて、自分の長所を言うことが「できる」ように変化

図４－２でみた「自分の良いところが何かを言うこと」が「できる」「できない」の変化には、勉強への意識の変化や、目標の明確さの変化などが関連している。例えば、勉強が「嫌い」から「好き」に変化した子どもは、勉強がずっと「嫌い」の子どもに比べて、「ずっと肯定」（「自分の良いところが何かを言うことができる」を維持）の比率が高く、また、他の子どもに比べて「否定→肯定」（言うことが「できる」ように変化）の比率も高い傾向がある。同様に、将来目標が「明確」になった子ども（「不明確」から「明確」に変化）は、将来目標がずっと「不明確」な子どもに比べて、「ずっと肯定」や「否定→肯定」の比率が高い。

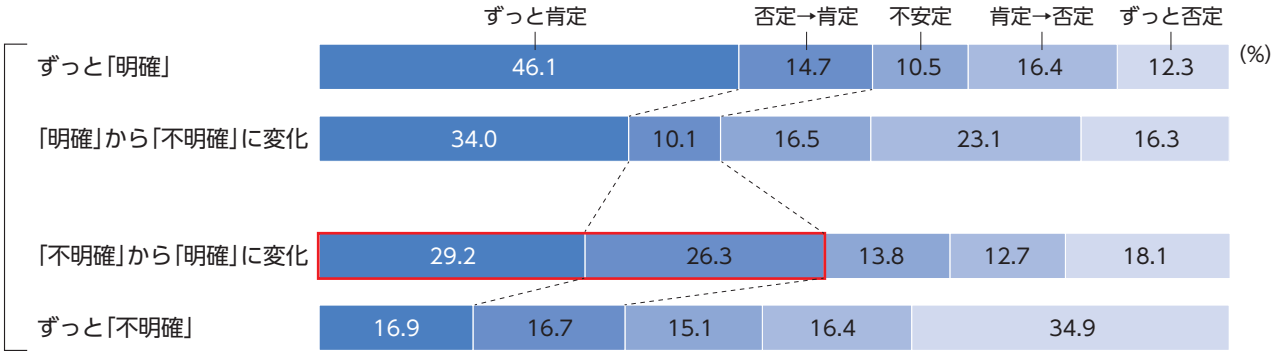
Q あなた自身のことについて、次のことはどれくらいあてはまりますか。

子ども 2015-2017　図４－３　「自分の良いところが何かを言うことができる」かどうかの３時点（２年間）の変化（小６生・中３生・高３生の合計）

①「勉強の好き嫌い」の変化別



②「将来目標がはっきりしているかどうか」の変化別



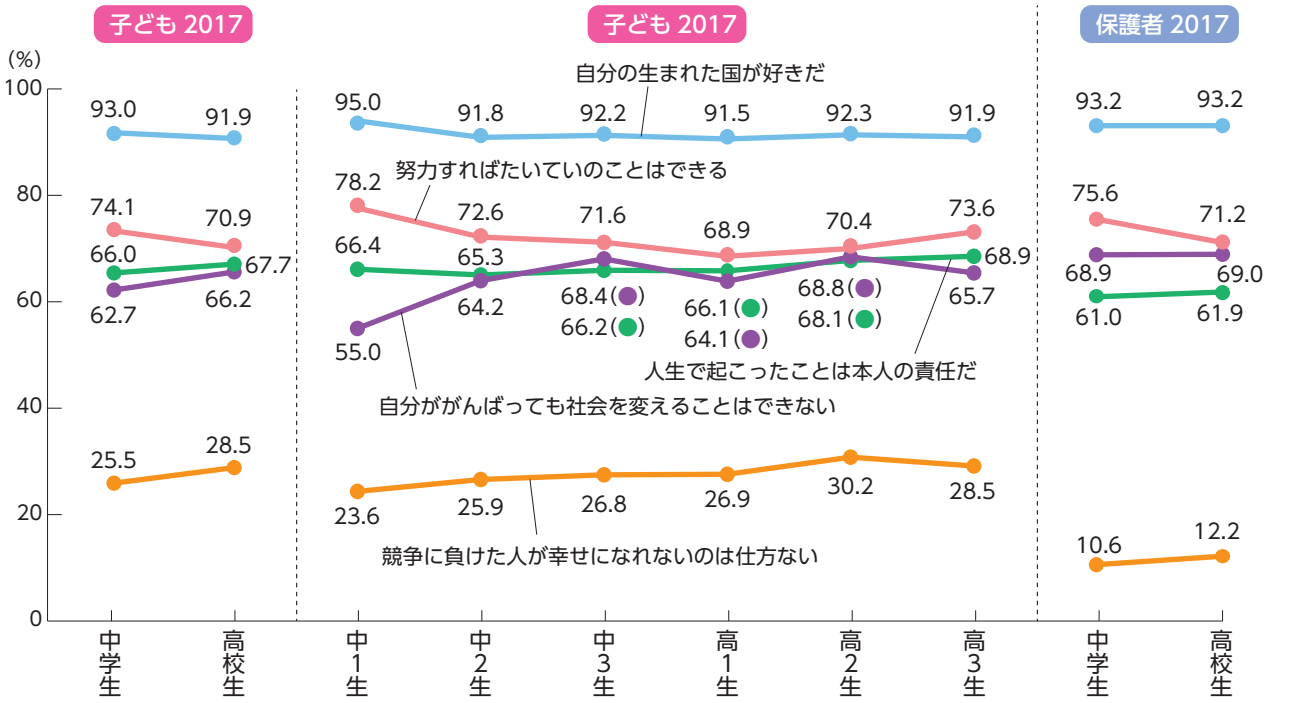
注　①「勉強の好き嫌い」の変化、②「将来目標がはっきりしているかどうか」の変化は、それぞれ2015年、2016年、2017年の３時点で、同じ子どもに同じ内容を尋ねて変化をみたもの。「不安定」なケース（①で「好き→嫌い→好き」「嫌い→好き→嫌い」と変化、②で「明確→不明確→明確」「不明確→明確→不明確」と変化）は、図から省略している。

成績上位ほど「努力すればたいていのことはできる」と感じている

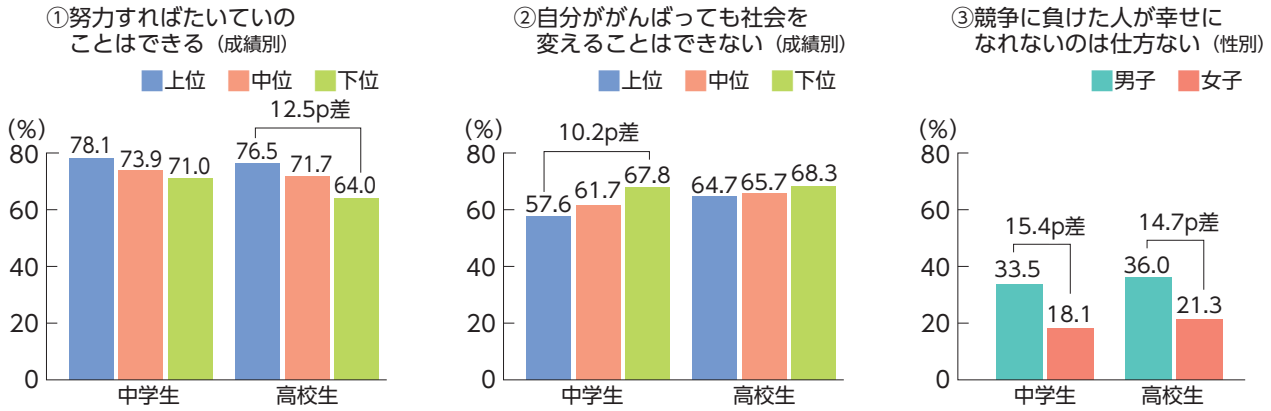
中１生から中２生にかけて、「努力すればたいていのことはできる」の比率が減少し、「自分ががんばっても社会を変えることはできない」の比率が増加する。これらを成績別にみると、上位の子どもほど「できる」と感じている傾向にある。また、子どものほうが保護者より比率が高いのは、「人生で起こったことは本人の責任だ」「競争に負けた人が幸せになれないのは仕方ない」である（５～15ポイント差）。特に、男子は女子に比べて「競争に負けた人が幸せになれないのは仕方ない」と回答している。

子ども　保護者　Q　あなたは、次のことについてどう思いますか。

図５－１　社会や競争についての意識（学校段階別、学年別）



子ども 2017　図５－２　社会や競争についての意識（学校段階別・成績別、性別）



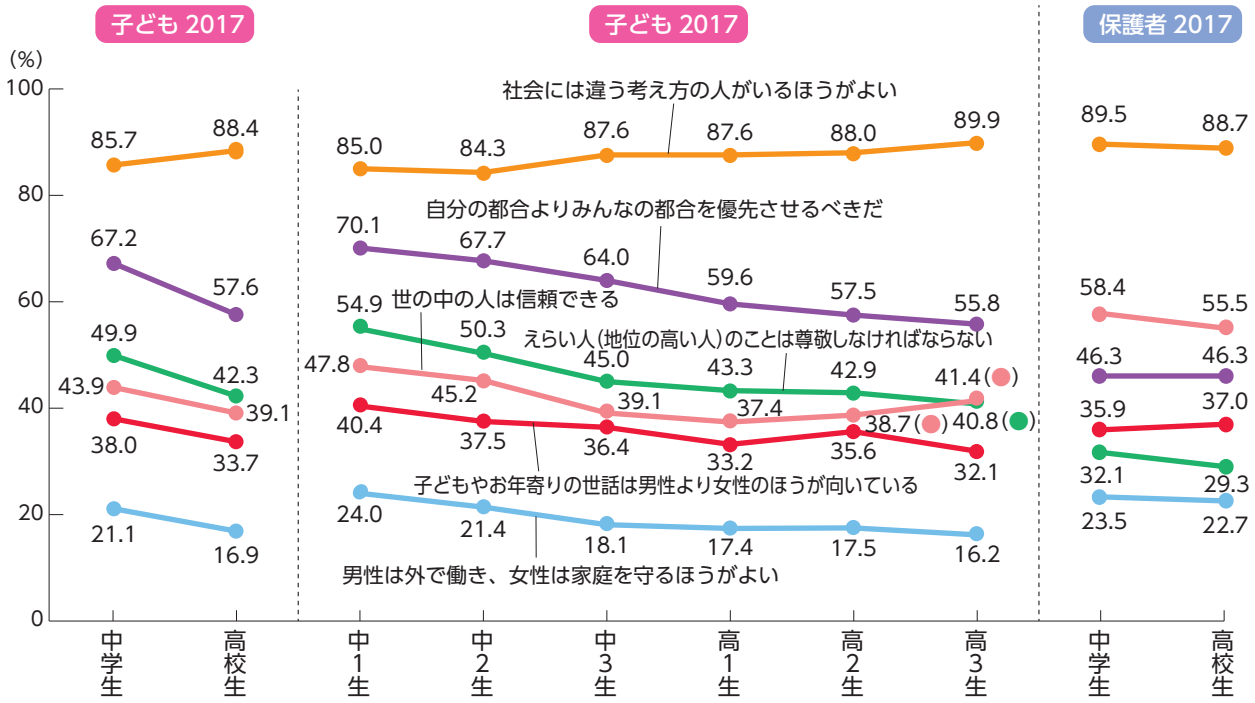
注１　小学生には尋ねていない（図５－１、図５－２）。
注２　「とてもそう思う」＋「まあそう思う」の％（図５－１、図５－２）。
注３　成績は、学年の中での自己評価（国数理社英の５教科についてそれぞれ５段階で回答）について総合得点を算出し、学校段階ごとに人数が均等になるように、「上位」「中位」「下位」の３つに分類した（図５－２）。
注４　成績別の上位と下位、または性別で10p以上差があるものに、p差を示している（図５－２）。

「世の中の人は信頼できる」と回答した子どもは約４割

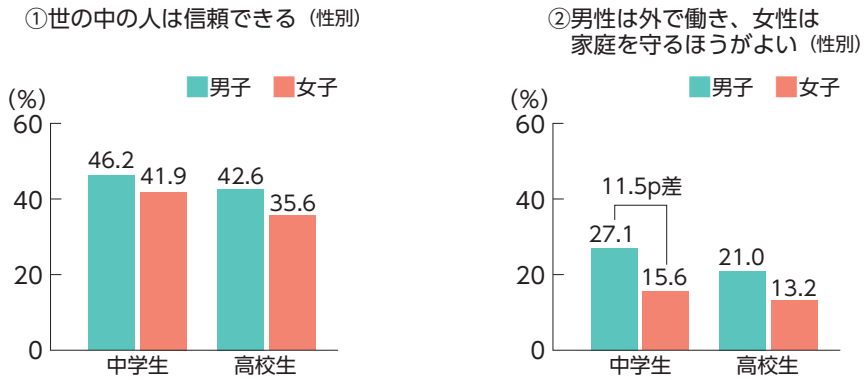
「社会には違う考え方の人がいるほうがよい」の比率は、どの学年でも８割台と高い。一方で、「自分の都合よりみんなの都合を優先させるべきだ」は、中１生から高３生にかけて約15ポイント低下して５割台になり、「世の中の人は信頼できる」も、中１生から高１生にかけて約10ポイント低下して４割弱になる。「世の中の人は信頼できる」の比率は、保護者より子どものほうが10ポイント以上低いのも特徴である。性別では、「男性は外で働き、女性は家庭を守るほうがよい」で差が大きく、男子の方が肯定している。

子ども　保護者　Q　あなたは、次のことについてどう思いますか。

図５－３　社会や人についての意識（学校段階別、学年別）



子ども 2017　図５－４　社会や人についての意識（学校段階別・性別）



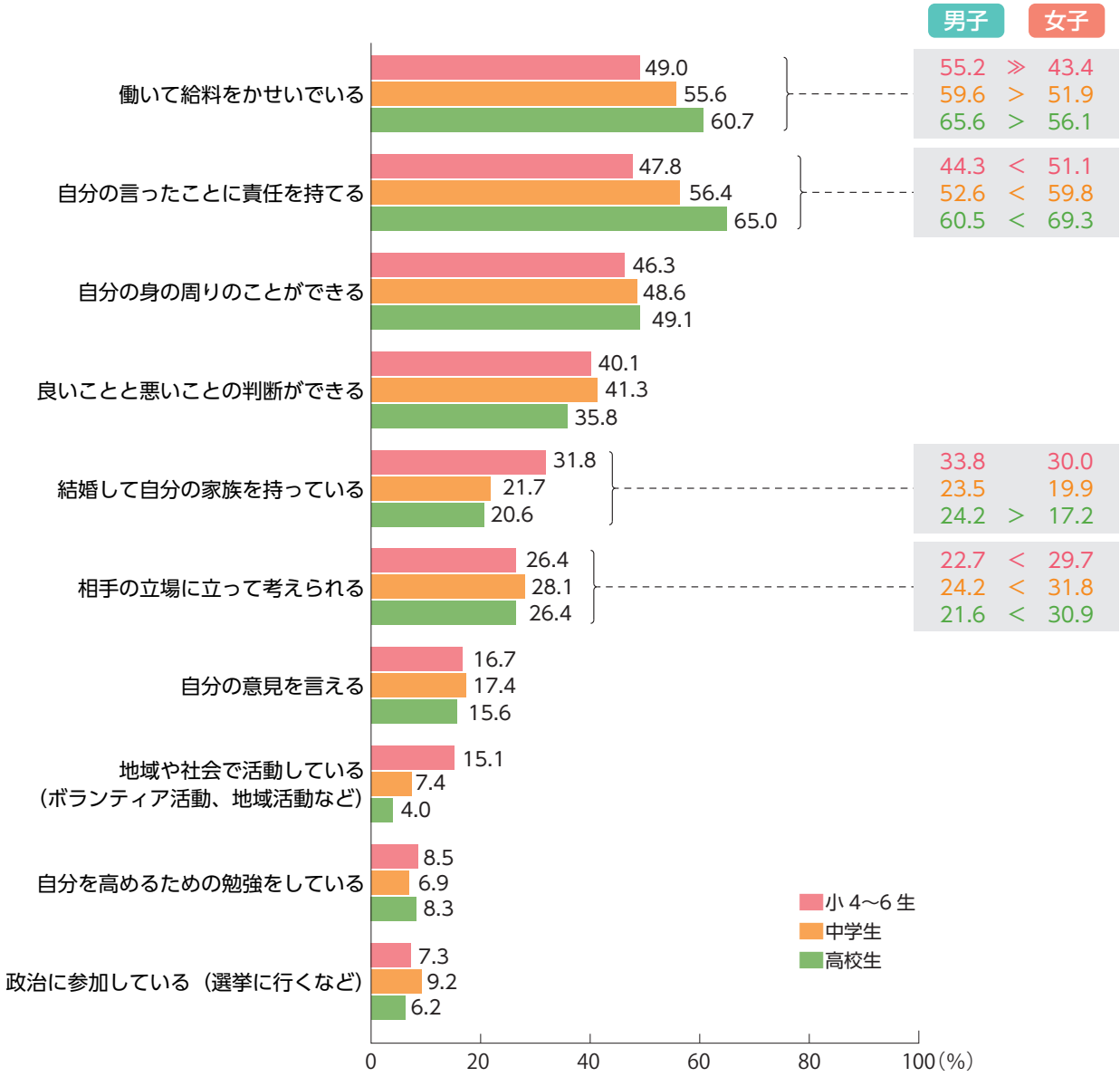
注１　小学生には尋ねていない（図５－３、図５－４）。
注２　「とてもそう思う」＋「まあそう思う」の％（図５－３、図５－４）。
注３　性別で10p以上差があるものに、p差を示している（図５－４）。

「大人」とは、「給料をかせいでいる」「言ったことに責任を持てる」

「一人前の大人」のイメージのTOP2は、「働いて給料をかせいでいる」「自分の言ったことに責任を持てる」で、小４～６生の約半数、高校生の６割強が選択している。「政治に参加している」の選択率はこのなかでは低い。性別にみると、男子のほうが高いのは、「働いて給料をかせいでいる」「結婚して自分の家族を持っている」、女子のほうが高いのは、「自分の言ったことに責任を持てる」「相手の立場に立って考えられる」である。

Q あなたは、「一人前の大人」とはどのような人だと思いますか（３つまで選択）。

子ども 2017　図６－１　「一人前の大人」のイメージ（学校段階別、性別）



注１　あてはまるものを３つまで選択してもらった。
注２　いずれかの学校段階で、性別で５p以上差がある場合に、性別の数値を示した。また、10p以上差がある場合は≪≫を、５p以上10p未満の差がある場合は＜＞をつけた。

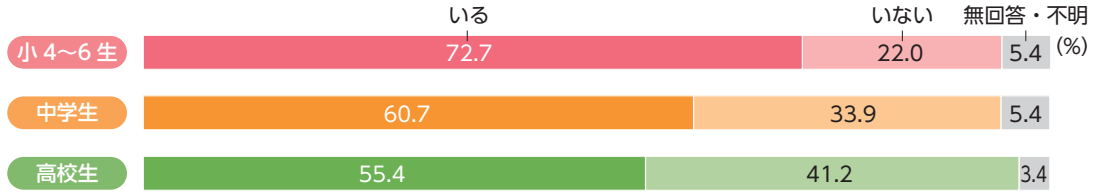
男子は「スポーツ選手」、女子は「お母さん」「先輩」「芸能人」

「あの人のようになりたい」と思う人が「いる」子どもは、小４～６生で約７割、中高生で６割前後である。「なりたい」と思う人がどのような人かは、学校段階や性別によって異なり、男子は、小中学生を中心に「スポーツ選手」「科学者や研究者」など社会的に活躍する人があがっている。女子は、「芸能人」のほか、小学生は「お母さん」、中学生は「上の学年の人（先輩）」など身近な人が多くあがっている。

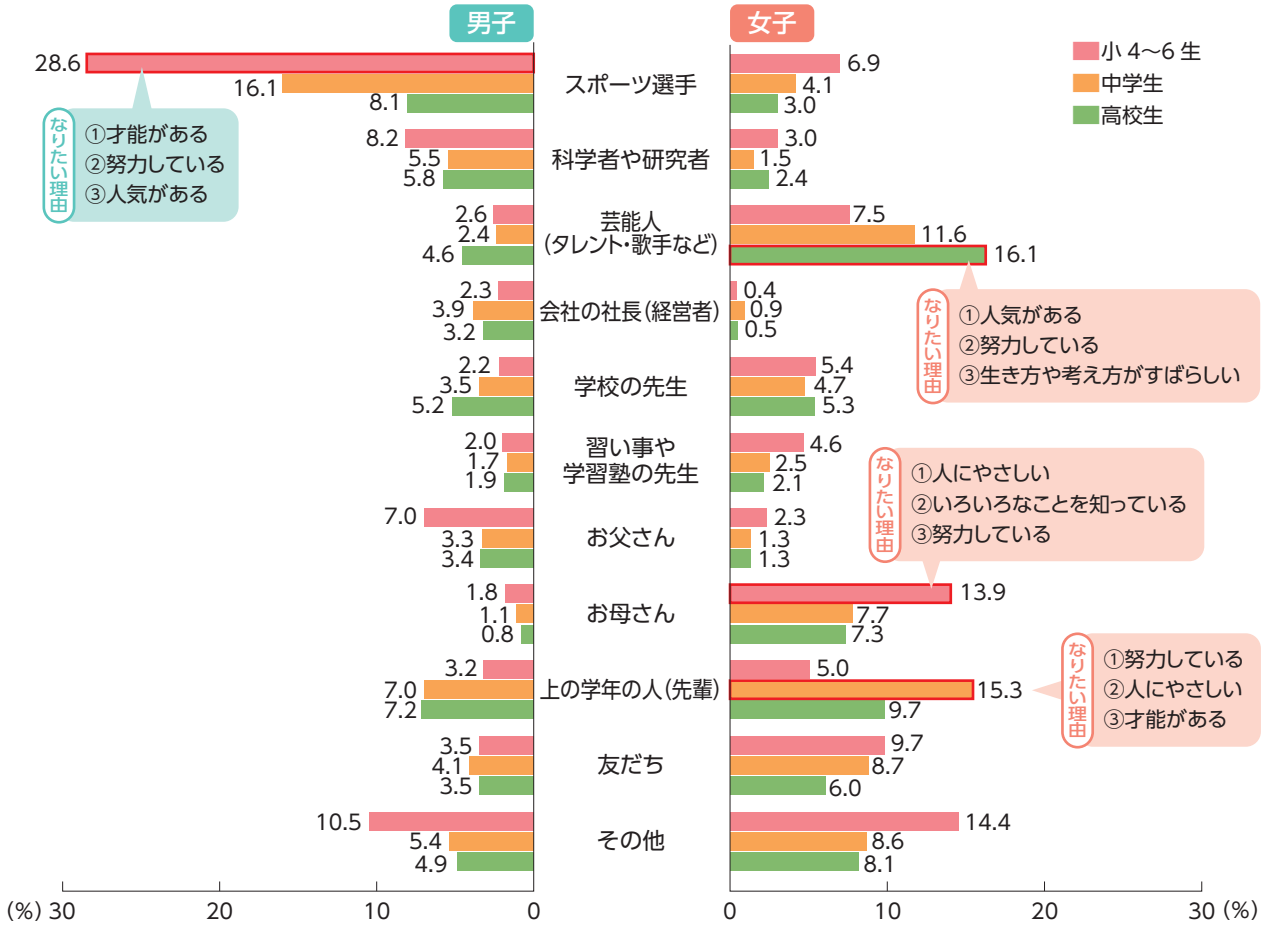
Q あなたが「あの人のようになりたい」と思う人（あこがれや目標とする人）はどのような人ですか（１つ選択）。

Q あなたが「あの人のようになりたい」と思う理由はなんですか（１つ選択）。

子ども 2017　図６－２　「あの人のようになりたい」と思う人がいるか（学校段階別）



子ども 2017　図６－３　「なりたい」と思う人とその理由（学校段階別・性別）



注１　「いる」は、図６－３の選択肢のうちどれかを選択した人、「いない」は「いない」を選択した人（図６－２）。
注２　「なりたい人」、および「なりたい理由」は、それぞれ選択肢から１つ選択してもらった。「なりたい人」の回答で比率が比較的高かったものについて、「なりたい理由」の上位３つを示している（図６－３）。

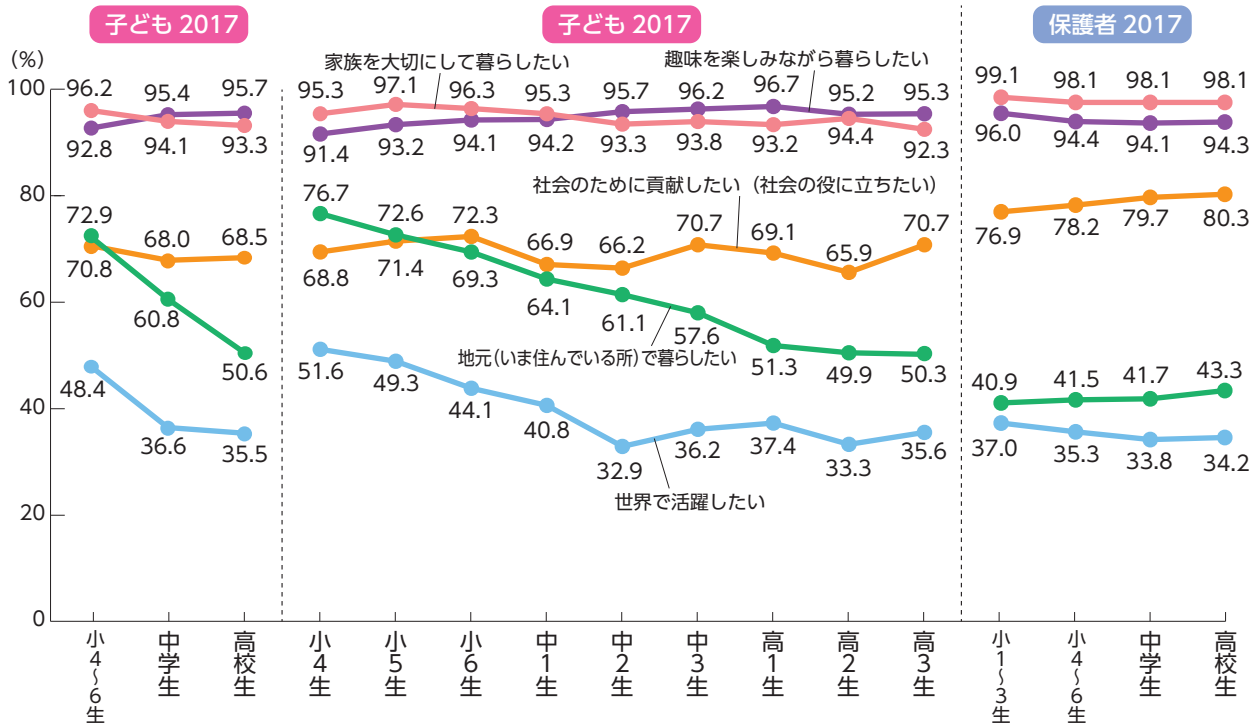
将来は「家族を大切に」「趣味を楽しみながら」暮らしたい

親子とも、「家族を大切にして暮らしたい（暮らしてほしい）」「趣味を楽しみながら暮らしたい（暮らしてほしい）」が、どの学校段階でも９割台と高く、「社会のために貢献したい（貢献してほしい）」も、子どもは７割前後、保護者は７～８割と高い。一方、子どもは、「地元で暮らしたい」が、小４生から高３生にかけて25ポイント以上、「世界で活躍したい」が小４生から中２生にかけて15ポイント以上低下する。また、成績別では、上位の子どもほど「貢献したい」の比率が高く、性別では、男子ほど「世界で活躍したい」の比率が高い。

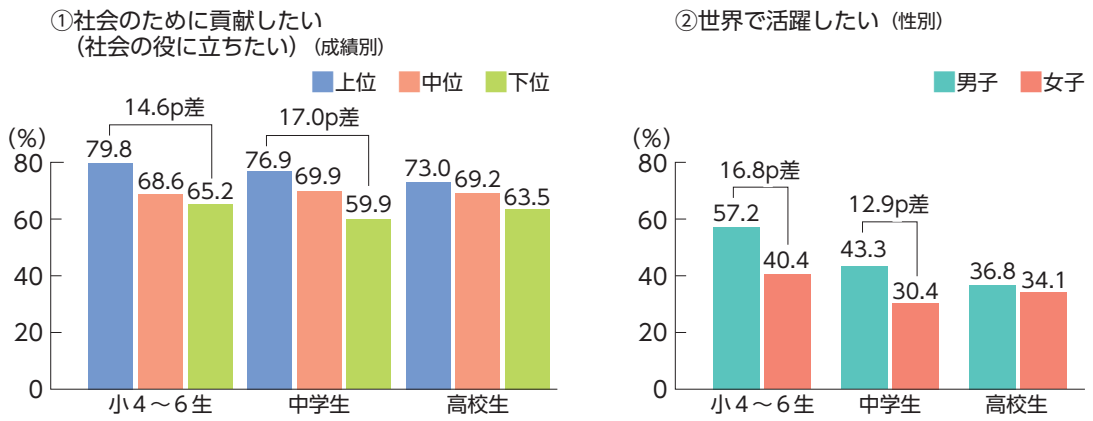
子ども　Q　あなた自身の将来について、次のことはどれくらいあてはまりますか。

保護者　Q　お子様の将来について、次のことはどれくらいあてはまりますか。

図７－１　将来の生活について（学校段階別、学年別）



子ども 2017　図７－２　将来の生活について（学校段階別・成績別、性別）



注１　保護者には、「～してほしい」かどうかを尋ねている（図７－１）。
注２　「とてもあてはまる」＋「まあまあてはまる」の％（図７－１、図７－２）。
注３　成績は、学年の中での自己評価（小４～６生は国算理社の４教科、中高生は国数理社英の５教科についてそれぞれ５段階で回答）について総合得点を算出し、学校段階ごとに人数が均等になるように、「上位」「中位」「下位」の３つに分類した（図７－２）。
注４　成績別の上位と下位、または性別で10p以上差があるものに、p差を示している（図７－２）。

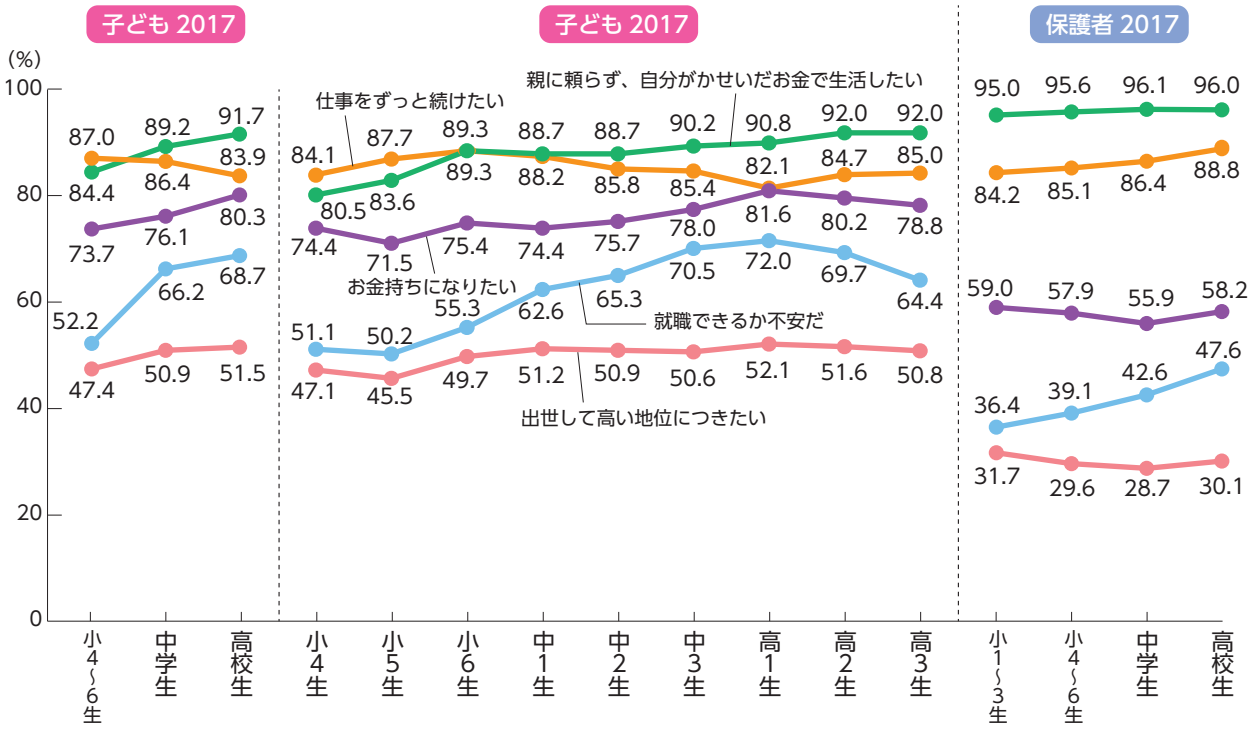
子どもは、保護者に比べて「お金持ちになりたい」「高い地位につきたい」と回答

「親に頼らず、自分がかせいだお金で生活したい」「仕事をずっと続けたい」と回答した子どもは、どの学校段階でも８～９割台と高く、保護者の比率に近い。一方、「お金持ちになりたい」「就職できるか不安だ」「出世して高い地位につきたい」は、子どもの比率のほうが高く、保護者と約15～20ポイント差である。成績別では、下位の子どもほど「就職できるか不安だ」、性別では、男子ほど「高い地位につきたい」と回答している。

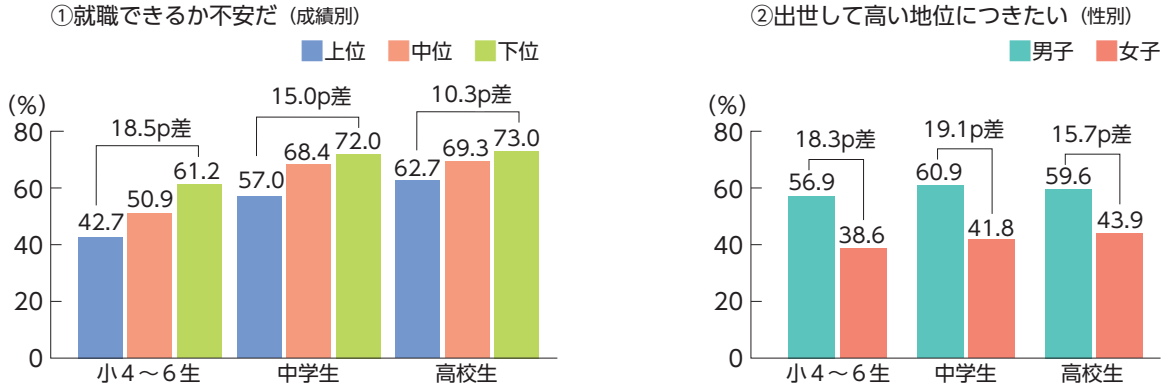
子ども　Q　あなた自身の将来について、次のことはどれくらいあてはまりますか。

保護者　Q　お子様の将来について、次のことはどれくらいあてはまりますか。

図７－３　将来の仕事やお金について（学校段階別、学年別）



子ども 2017　図７－４　将来の仕事やお金について（学校段階別・成績別、性別）



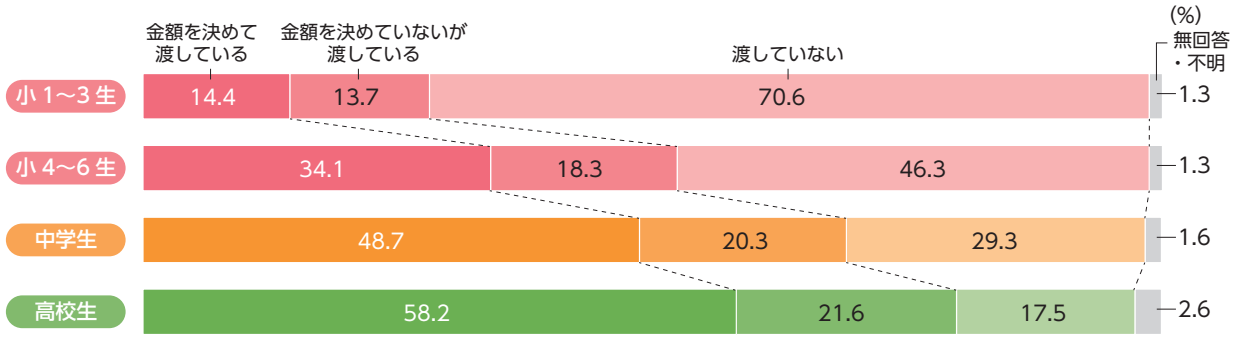
注１　保護者には、「～してほしい」かどうかを尋ねている。「就職できるか不安だ」は保護者も同じ尋ね方をしている（図７－３）。
注２　「とてもあてはまる」＋「まあてはまる」の％（図７－３、図７－４）。
注３　成績は、学年の中での自己評価（小４～６生は国算理社の４教科、中高生は国数理社英の５教科についてそれぞれ５段階で回答）について総合得点を算出し、学校段階ごとに人数が均等になるように、「上位」「中位」「下位」の３つに分類した（図７－４）。
注４　成績別の上位と下位、または性別で10p以上差があるものに、p差を示している（図７－４）。

おこづかいの「金額を決めて渡している」は高校生保護者で６割弱

おこづかいの「金額を決めて渡している」保護者は、小１～３生で１割台、高校生で６割弱である。また、「金額を決めていないが渡している」保護者も比較的多く、中高生で約２割である。おこづかいの月額をみると、小１～３生は「500円未満」、小４～６生は「500～1,000円未満」、中学生は「1,000～2,000円未満」の比率が高い。高校生は、金額のばらつきがみられる。

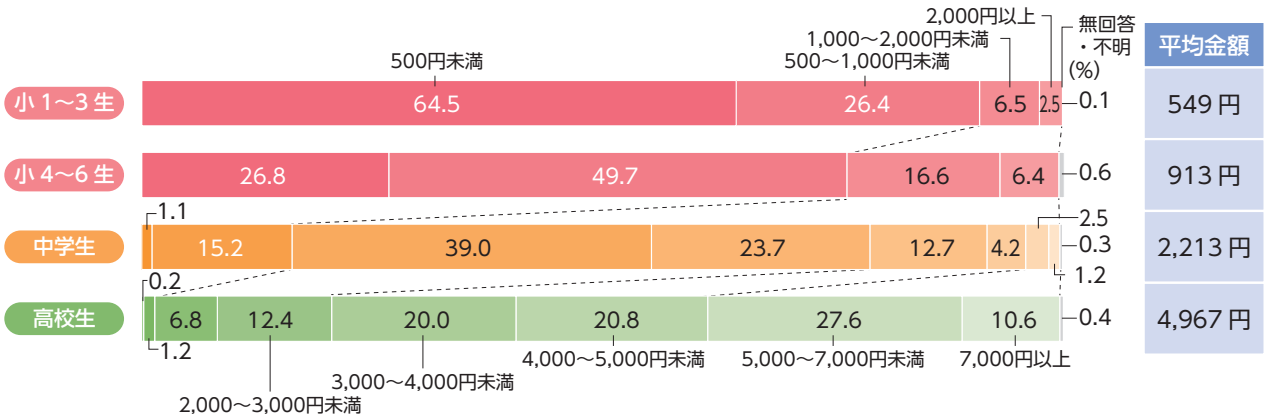
Q お子様におこづかいを渡していますか。

保護者2017　図８－１　おこづかいを渡しているか（学校段階別）



Q お子様に渡している金額は、月にいくらくらいですか。おこづかいの金額を決めていない方も、お子様に渡しているだいたいの月額をお答えください。

保護者2017　図８－２　渡しているおこづかいの月額（学校段階別）



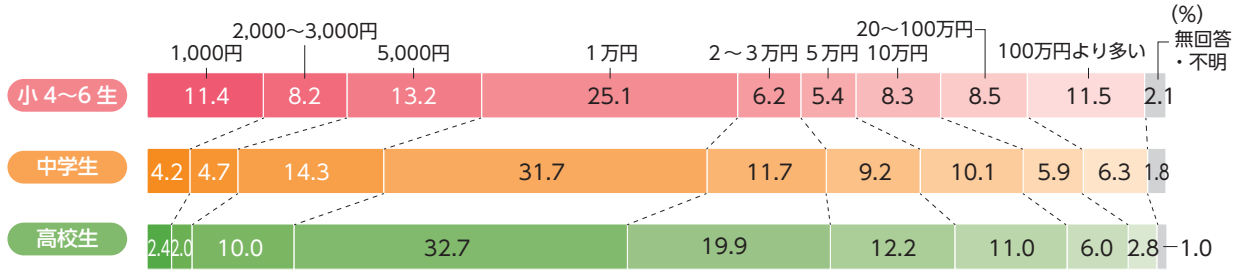
注１　図８－１で「金額を決めて渡している」「金額を決めていないが渡している」と回答した人に尋ねている（図８－２）。
注２　中高生の「7,000円以上」は、「7,000～10,000円未満」＋「10,000～20,000円未満」＋「20,000円以上」の％。小学生の「2,000円以上」は、中高生で示している「2,000～3,000円未満」～「7,000円以上」の合計の％（図８－２）。
注３　平均金額は、「500円未満」を250円、「500～1,000円未満」を750円、「20,000円以上」を25,000円のように置き換えて、無回答・不明を除いて算出した（図８－２）。

「大金」のイメージは、「1,000円」から「100万円より多い」まで個人差がある

子どもに「大金」だと思う金額を尋ねたところ、どの学校段階でも「１万円」と回答した比率が高い。しかし、小４～６生は、「1,000円」の回答も、「100万円より多い」の回答も１割強であり、子どもによってばらつきがみられる。また、もらいたいおこづかいの月額をみると、小４～６生は「500～1,000円未満」、中学生は「1,000～2,000円未満」の比率が高い。ただし、保護者の回答（図８－２）と比べると、子どもがもらいたいおこづかいのほうが、どの学校段階でも平均金額で2,000円程度多い。

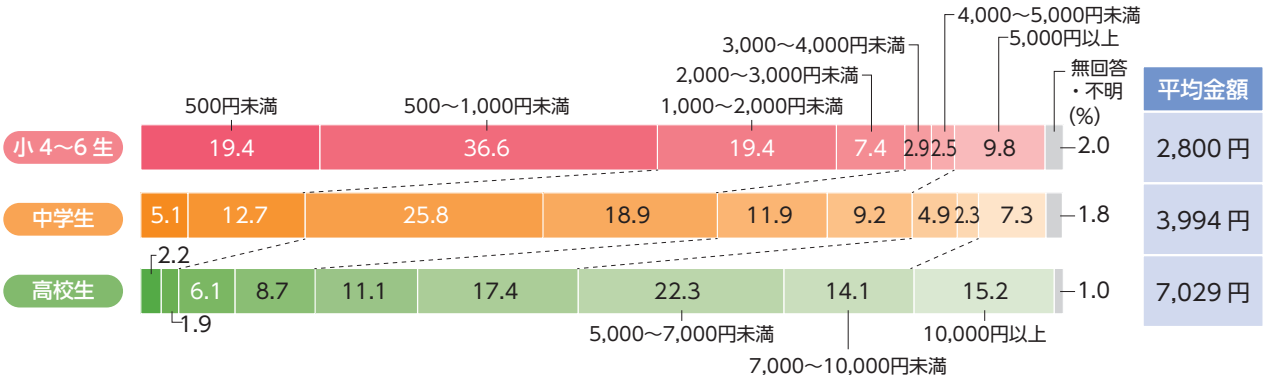
Q あなたにとって「大金」だと思う金額を教えてください（１つ選択）。

子ども 2017　図８－３　「大金」だと思う金額（学校段階別）



Q あなたが１か月にもらいたい「おこづかい」の金額を教えてください（１つ選択）。

子ども 2017　図８－４　もらいたいおこづかいの月額（学校段階別）



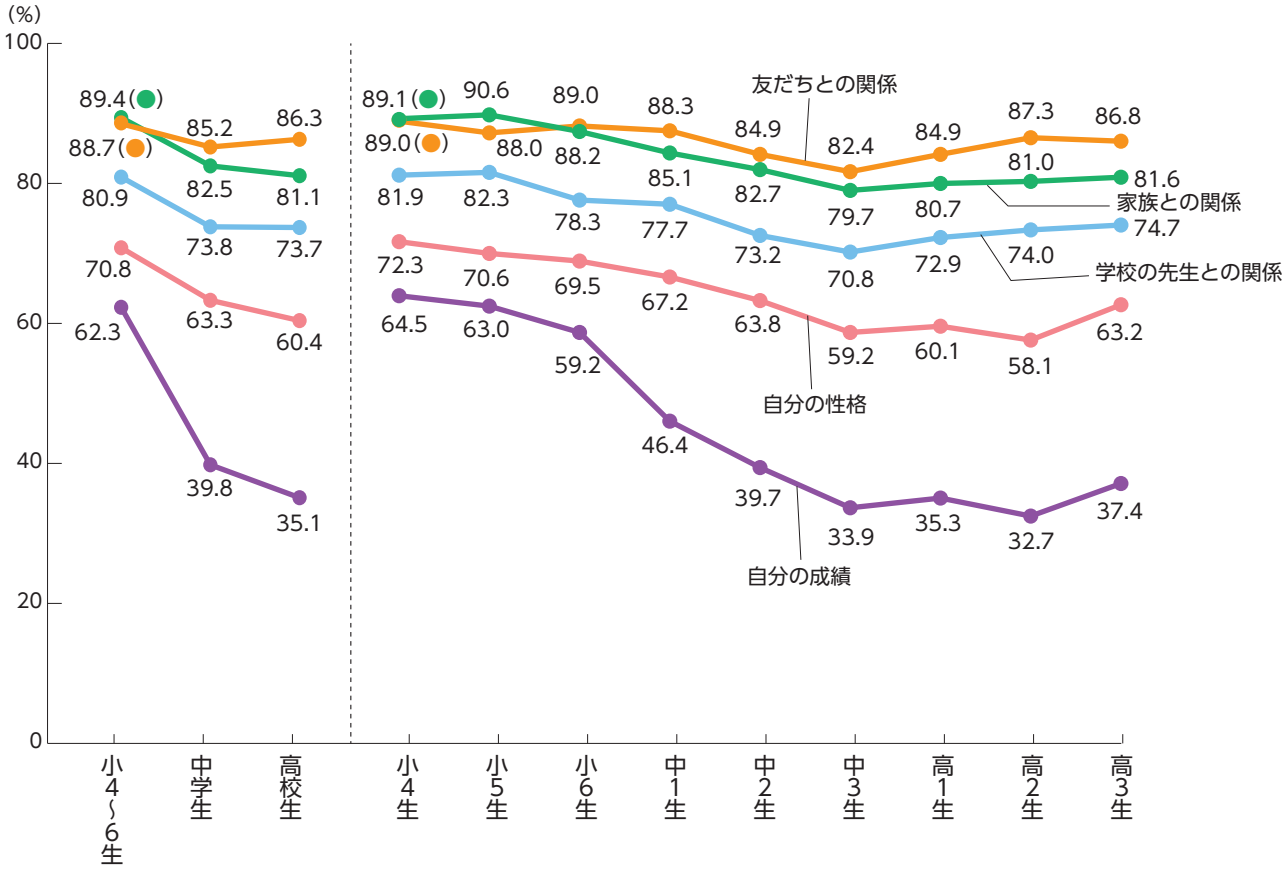
注１　「20～100万円」は、「20～30万円」＋「50万円」＋「100万円」の％（図８－３）。
注２　おこづかいをもらっていない子どもも回答している（図８－４）。
注３　中高生の「10,000円以上」は、「10,000～20,000円未満」＋「20,000円以上」の％。小４～６生の「5,000円以上」は、中高生で示している「5,000～7,000円未満」～「10,000円以上」の合計の％（図８－４）。
注３　平均金額は、「500円未満」を250円、「500～1,000円未満」を750円、「20,000円以上」を25,000円のように置き換えて、無回答・不明を除いて算出した（図８－４）。

「成績」や「性格」の満足度が中学生で低下

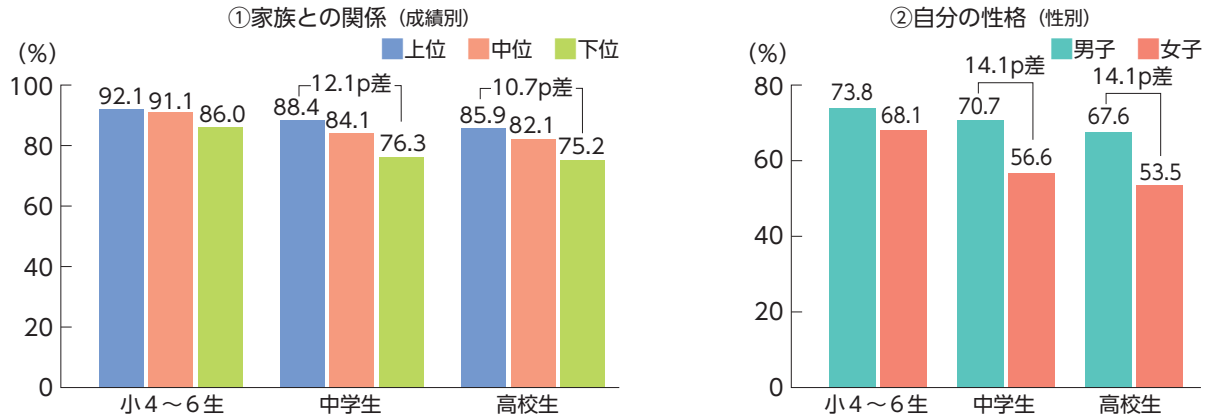
「友だちとの関係」「家族との関係」の満足度は、どの学校段階でも８割台と高い。「学校の先生との関係」の満足度も、７～８割台である。しかし、「自分の性格」に対する満足度は、小４～６生は約７割だが、中高生で６割台に低下、「自分の成績」への満足度は、小４～６生で６割強だが、中高生で３割台に低下する。成績別にみると、「家族との関係」の満足度は下位の子どもほど低い。また、「自分の性格」の満足度は、女子のほうが低く、中高生は差が大きい。

Q あなたは、次のことにどれくらい満足していますか。

子ども 2017　図９－１　自分や人間関係に対する満足度（学校段階別、学年別）



子ども 2017　図９－２　自分や生活に対する満足度（学校段階別・成績別、性別）



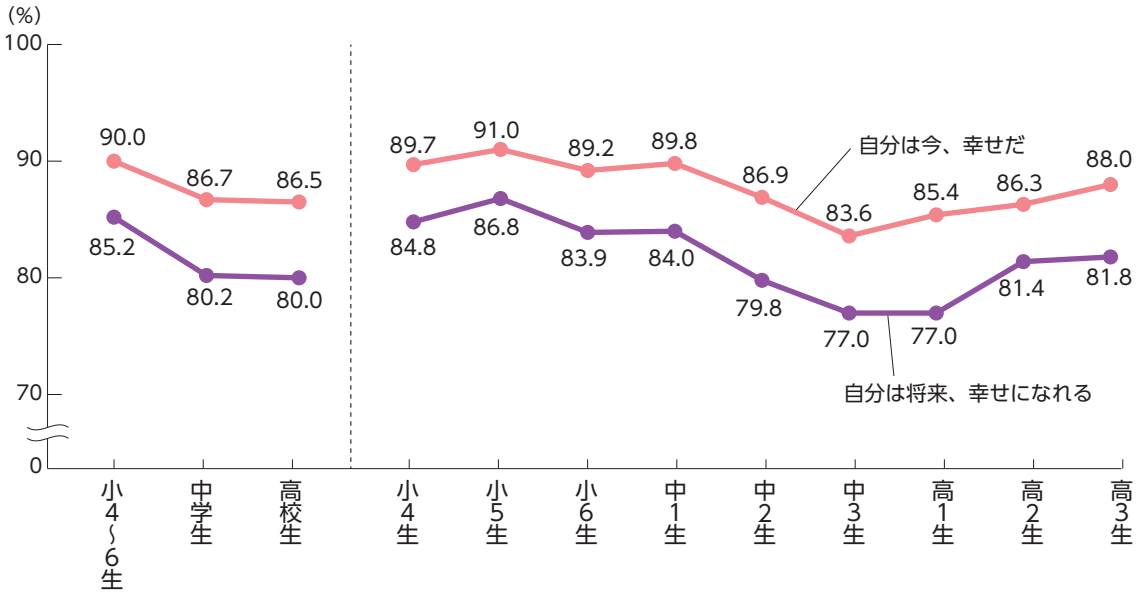
注１　「とても満足している」＋「まあ満足している」の%（図９－１、図９－２）。
注２　成績は、学年の中での自己評価（小４～６生は国算理社の４教科、中高生は国数理社英の５教科についてそれぞれ５段階で回答）について総合得点を算出し、学校段階ごとに人数が均等になるように、「上位」「中位」「下位」の３つに分類した（図９－２）。
注３　成績別の上位と下位、または性別で10p以上差があるものに、p差を示している（図９－２）。

「自分は今、幸せだ」と感じている子どもは８～９割。「将来、幸せになれる」の比率のほうがやや低い

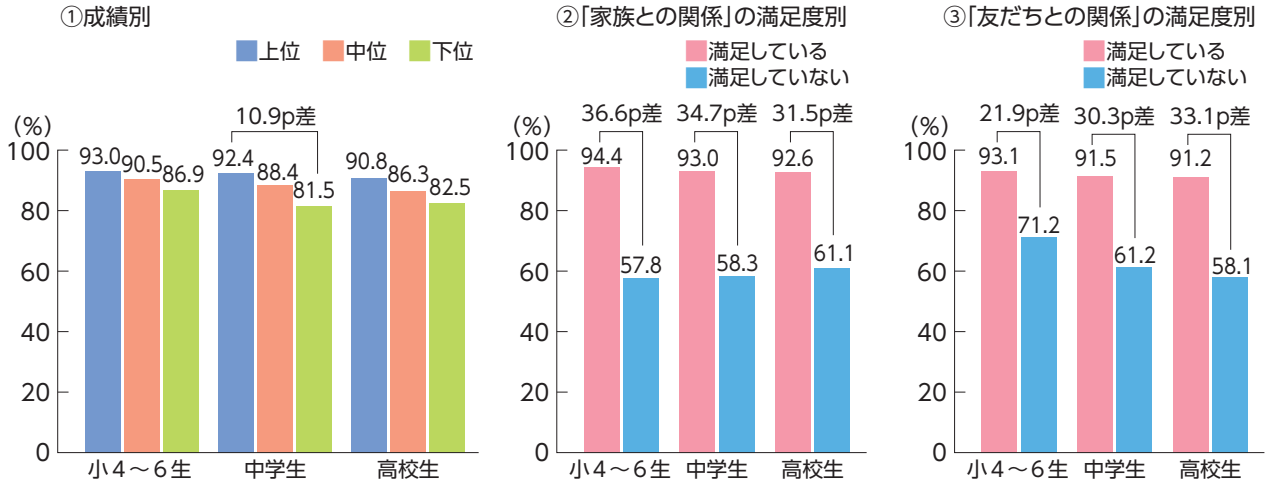
「自分は今、幸せだ」と感じている子どもは８～９割である。学年差は小さいが、小５生がもっとも高く、中３生がもっとも低い。また、「自分は将来、幸せになれる」の比率は７～８割台で、「今」と比べると「将来」のほうが、どの学年でも５ポイント前後低い。成績別にみると、上位の子どもは、下位の子どもに比べて、「今、幸せだ」と感じている比率が高い。また、「家族との関係」や「友だちとの関係」の満足度は、「今」の幸福感と強く関連している。

Q あなたは、次のことをどう思いますか。

子ども 2017　図９－３　幸福感（現在・将来）（学校段階別、学年別）



子ども 2017　図９－４　幸福感（現在）（学校段階別・成績別、家族や友だちとの関係別）



注１　「とてもそう思う」＋「まあそう思う」の％（図９－３、図９－４）。
注２　成績は、学年の中での自己評価（小４～６生は国算理社の４教科、中高生は国数理社英の５教科についてそれぞれ５段階で回答）について総合得点を算出し、学校段階ごとに人数が均等になるように、「上位」「中位」「下位」の３つに分類した（図９－４）。
注３　「家族との関係」「友だちとの関係」の満足度は、図９－１の回答を用いている。「満足している」は、「とても満足している」「まあ満足している」と回答した子ども、「満足していない」は、「あまり満足していない」「まったく満足していない」と回答した子ども（図９－４）。

東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所 共同研究「子どもの生活と学び」研究プロジェクト

「子どもの生活と学びに関する親子調査 2015-2017」

調査企画・分析メンバー

プロジェクト代表者

石田　浩（東京大学社会科学研究所教授）／ 谷山　和成（ベネッセ教育総合研究所所長）

プロジェクトメンバー

耳塚　寛明（お茶の水女子大学教授）
秋田　喜代美（東京大学教授）
松下　佳代（京都大学教授）
佐藤　香（東京大学教授）
藤原　翔（東京大学准教授）
香川　めい（大東文化大学講師）
木村　治生（ベネッセ教育総合研究所主席研究員）
邵　勤風（ベネッセ教育総合研究所 初等中等教育研究室室長、主席研究員）
橋本　尚美（ベネッセ教育総合研究所主任研究員）
岡部　悟志（ベネッセ教育総合研究所主任研究員）
松本　留奈（ベネッセ教育総合研究所研究員）
渡邉　未央（ベネッセ教育総合研究所研究スタッフ）

※所属・肩書きは、発刊時のものです。

本プロジェクトのWEBサイトのご案内

本プロジェクトや本調査に関しては、以下の WEB サイトに掲載しています。

東京大学社会科学研究所：**http://web.iss.u-tokyo.ac.jp/clal/**

ベネッセ教育総合研究所：**https://berd.benesse.jp/special/childedu/**

● お問合わせ先 ●
本速報版に関するお問合わせは、下記までお願いいたします。
(株)ベネッセコーポレーション　ベネッセ教育総合研究所「子どもの生活と学びに関する親子調査」係
TEL：0120-105506　受付時間：10：00～17：30（12：00～13：00、土日祝日を除く）

ベネッセ教育総合研究所 初等中等教育研究室のWEB サイトのご案内
各種調査データに関しては、**https://berd.benesse.jp/shotouchutou/**

ベネッセ　初等中等　**検索**　で検索してください。

「子どもの生活と学びに関する親子調査2015-2017」速報版
発 行 日：2018年5月31日　発行人：谷山 和成　編集人：邵 勤風
発 行 所：㈱ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所
編集協力：㈱ジー・アンド・ピー

©Benesse Educational Research and Development Institute
無断転載を禁じます。